

『真草二行節用集』 諸版の本文と性格

高 梨 信 博

はじめに

諸版の系統と異同の概観

近世前期、寛永から寛文年間にかけて、節用集の流布の中心となった『真草二行節用集』には、現在、十四の版種を確認することができる。それらの十四版の系統関係と相互の異同の概観については別稿に述べたが、⁽¹⁾そこでは、それらの異同の内容を具体的に例示するには至らず、またそれらの異同に反映された改版の姿勢から知りうる各版の性格についても多く述べることはできなかった。本稿では、項目の配列、増補と削除、語形のゆれと補訂などの実質的な本文のことなりを中心に諸版の異同をとりあげ、そこからうかがうことのできる各版の性格と近世節用集の改版の過程について考えてみたい。

はじめに、前稿に述べたところから、本稿の前提として必要なことがらをまとめておきたい。『真草二行節用集』の十四の版とその系統関係は、次ページの図1のとおりである。

以下で各版の異同を指摘するばあい、その異同は、この系統関係のもとで直接の親子関係となる版のあいだでの対校によるものである。

つぎに、諸版の異同を対照した表のうち、本稿に直接かわる部分のみを抜きだして示せば、次ページの表1のとおりである。⁽²⁾

『真草二行節用集』の十四の版種は、相互の類似とことなりのどあいに応じていくつかのグループにまとめることができる。たとえば、半葉あたりの行数を指標とすれば六行本と七行本の二類にわかれることになるが、『真草二行節用集』のばあい、このような行数による分類は、本文の実質的な異同にはかならずしも対応しない。

本文の実際上の類似のどあいによって十四版をグループにまとめる
とすれば、表1のうち、④にあげた項目配列のことがめやすと
なろう。項目配列をことにする版では、表1の⑤以下の異形、削除
などにも、ほぼ対応して相違がみられる。ただし、無刊記両点版は、
項目配列については寛永十五年版以下の諸版とともに一類をなすが、

図1 諸版の系統関係

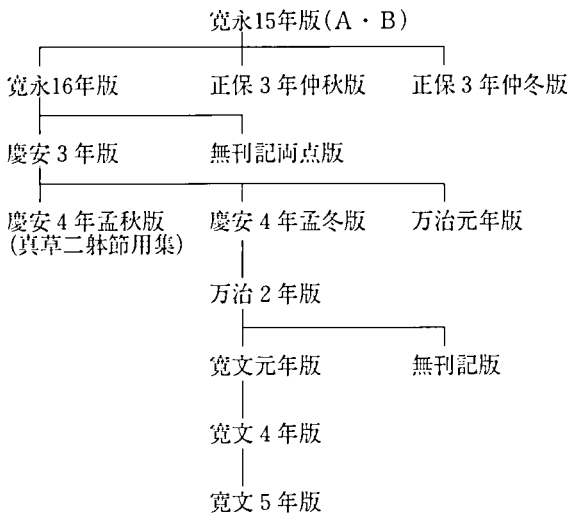


表1 諸版の異同

	① 紙数	② 〈節用〉紙数	③ 行数	④ 配列	⑤ 異形	⑥ 補訂	⑦ 増補	⑧ 削除
寛永15(A)	126	109丁1行	6	—	—	—	—	—
寛永15(B)	126	109丁1行	6	0	0	0	0	0
寛永16	126	109丁1行	6	0	0	13	0	0
正保3 仲秋	126	109丁1行	6	0	1	2	0	0
正保3 仲冬	126	109丁1行	6	0	4	1	0	0
慶安3	126	109丁1行	6	0	8	21	0	0
慶安4 孟秋	109	94丁1行	7	3	0	1	0	0
慶安4 孟冬	111	94丁1行	7	0	7	2	0	0
万治元	127	109丁3行	6	251	131	52	3	35
万治2	95	78丁4行	7	260	51	90	0	11
寛文元	95	78丁4行	7	0	0	2	0	0
寛文4	86	69丁2行	7	112	7	4	0	2
寛文5	86	69丁2行	7	0	0	14	0	0
無刊記	95	78丁4行	7	229	75	17	0	4
無刊記両点	126	109丁1行	6	1	13	70	7	0

両点という形式と、それに起因すると思われる補訂の多さなどにお
いて、別に一類を立てるべきものと考ええる。したがって、本稿では、
『真草二行節用集』の十四版をつぎのように六類にわちたい。

a 類 寛永十五年版 (A) (B)
寛永十六年版

正保三年仲秋版

正保三年仲冬版

慶安三年版

慶安四年孟秋版

慶安四年孟冬版

b類 無刊記両点版

c類 万治元年版

d類 万治二年版

寛文元年版

e類 寛文四年版

寛文五年版

f類 無刊記版

a類としてまとめた七版のうちにも版によることなりはみられるが、それらは改版時の誤りによって生じたものが多く、b類以下の諸版と比べたばあい、その相違は別にグループを立てるほどのものとはいえない。

以下、項目配列、項目の増補と削除、語形のゆれと補訂を中心に、諸版の本文について具体的にみていく。

項目の配列

近世節用集の版種間の関係をたどるにあたって、項目の配列は

もつとも大きい手がかりとなるものである。『真草二行節用集』の改版において、なぜ項目配列に変更を生じているのかということは、その改版、特に版下の作成が具体的にどのような手順でなされたのかということと切りはなしては考えられないが、そうしたことがらに関する記録はなく、現存の諸版によって推測するにとどまらざるをえない。改版における版下としては、先行の版の一本をそのまま用いるばあい（いわゆるかぶせ彫り）と、あらたに版下用の写本を作るばあいがあつたものと考えられる。前者のばあいでも、部分的に手を加えるということはあつたであろうが、項目配列をかえるといった変更は生じにくい。後者では、透き写し、臨模、見取り書きといった書写態度の違いに応じた版下がありえ、かぶせ彫りに比べ、項目配列に変更を生じる可能性が高いといえる⁽³⁾。

前述のとおり、項目配列からみて、『真草二行節用集』は五つのグループにわかれる。つまり、初版と考えられる寛永十五年版にはじまる諸版のなかで、項目配列に変更を生じる改版が四回、おこなわれている。寛永十五年版と同じ項目配列をもつ諸版（a類、b類）のなかで、慶安四年孟秋版と無刊記両点版は、それぞれ三箇所と一箇所⁽⁴⁾で項目配列をことにするが、これらはいずれも行を単位とするもので、項目を単位とする配列変更とは異質である。b類の無刊記両点版の例は、き部乾坤門の末尾二行（八十二丁裏一、二行目）を入れかえたものであるが、これは、依拠した寛永十六年版において、一行目の下部に六センチほどの空白があるのに対し、二行

目は行末まで項目があるところから、この二行を逆転させて、乾坤門の途中に意味不明の空白があるという状態を解消しようとしたものである⁽⁵⁾。

『真草二行節用集』のばあい、項目配列に変更を生じていない版のあいだでは、巻頭から巻末に至るまで、行移りの位置が一致し、一行内に収められる項目は同じである。特別な理由がないかぎり、先行の版をひきつぐのには、その方がてまもかからないであろう。項目配列をかえることによって一行あたりの所収項目に違いを生じることとは、版下作成のうえではより大きなてまをもたなしたはずであり、項目配列の変更にはそれだけの理由があるものと考えなくてはならない。

『真草二行節用集』には、項目配列に変更を加えた版として四つのグループがあるが、それらについて、具体的にどのような項目配列が改められているかをみていくと、あきらかなものとして、配列変更の要因に大別して二種類あり、版によってそのいずれかの要因が特に強くはたらいっていることがわかる。その二つの要因のうち、一つは特定の項目の配列変更を目的とするものであり、もう一つは特定の項目の配列変更自体が目的というわけではなく、別の理由から配列変更がひきおこされているというものである。配列変更のみられる四つの版種のグループのうち、d類の万治二年版は前者に属し、c類の万治元年版とf類の無刊記版は後者に属する。e類の寛文四年版については、どのような原則によって配列変更がなされ

ているのか、よくわからないところがある。

ここで特定の項目の配列変更それ自体を目的としたものは、同門内における項目相互の関連にてらして、有縁性の強い項目を類聚しようとしたと考えられるような配列変更である。万治二年版がよつたと考えられる慶安四年孟冬版には、つぎのような項目配列がある。

影瓦 蔭(上22才4)

万治二年版では、これを〈影瓦〉とし、〈かげ〉をまとめている。また、慶安四年孟冬版では、上巻十六丁表七行目から同丁裏一行目にかけて、〈珍〉を頭字とする項目五項があり、そのあと、同丁裏五行目に〈珍重〉があるが、万治二年版では、これを前に移して、〈珍〉を頭字とする項目を一箇所にまとめている。さらに、慶安四年孟冬版では、下巻十八丁裏の気形門において、〈雲雀〉に始まる鳥名の項目九項のあとにつぎのように項目が配列されている。

蟾蜍 鵪 額白 蟬晚 干鯛 鵪 氷魚 豹 羊 鯉

これらの項目が万治二年版では、つぎのように配列されている。

鵪 鵪 蟾蜍 額白 蟬晚 豹 羊 干鯛 氷魚 鯉

ここでは、〈鵪・鵪〉を前に移して、先行する鳥名の項目に接続させるとともに、〈干鯛・氷魚〉をうしろに移して〈鯉〉につらね、魚類の項目をまとめている。万治二年版の配列変更箇所二百六十のうち、このような関連項目の類聚とみられるものは約百箇所にのぼる。この数は、配列変更箇所全体の半数に及ばないが、つぎに

のべる行末調整を意図したとみられる配列変更よりも多く、万治二年版における項目配列を特徴づけるものとなっている。

一方、万治元年版と無刊記版では、こうした関連項目の類聚とみなしうるような配列変更は、ごく少数である。万治元年版とこれによったと考えられる慶安三年版において、〈捕〉という項目は、それぞれ左図のように配列されている。すなわち、慶安三年版と比べて万治元年版ではこの項目を一項前に出しているのであるが、これは万治元年版の行末に残されているスペースが小さく、慶安三年版の配列どおりに〈鳥闘〉^{とりあな}を収めることができないため、次項以

下からこのスペースにみあう長さの項目を移してきたものであろう。このように、一項目が二行にわたることを避けるために行末部に位置すべき項目についてとられる処置を行末調整とよぶとすれば、万治元年版と無刊記版における項目配列の変更の多くは、この行末調整を目的とするものと考えられる⁽⁹⁾。

a 類の諸版のように、行移りの位置に変更がなく、一行内に収められる項目が同じであれば、行末調整の必要は生じない。同時に、一項目が二行にわたることを避けるという制限がなければ、やはり行末調整はおこなわれないであろう。

捕	歌	鯨	波	友	達	常	世	拔	人	鹿	角	終	古	鳥	闘
捕	歌	鯨	波	友	達	常	世	拔	人	鹿	角	終	古	鳥	闘
捕	歌	鯨	波	友	達	常	世	拔	人	鹿	角	終	古	鳥	闘

慶安三年版

捕	歌	鯨	波	友	達	常	世	拔	人	鹿	角	終	古	鳥	闘
捕	歌	鯨	波	友	達	常	世	拔	人	鹿	角	終	古	鳥	闘
捕	歌	鯨	波	友	達	常	世	拔	人	鹿	角	終	古	鳥	闘

万治元年版

『真草二行節用集』の諸版のうち、d類の万治二年版とe類の寛文四年版は、紙数削減を意図して、文字の大きさや間隔を改めたり、版面のたての長さを広げたりしており、行移りの位置も依拠した版とはことなっている。c類の万治元年版とf類の無刊記版は、紙数削減のためというわけではないが、版下の書体や文字の大きさが依拠した版とことなり、やはり行移りの位置に違いを生じている。

一項が二行にわたることを避けるという傾向は近世節用集に広くみられるものであり、さきに拙稿でも草書本節用集についてこの現象を指摘した。⁽¹¹⁾『真草二行節用集』の諸版において、漢字見出しが二行にわたる項目の数は、つぎのようになっている。

a・b類	9
c類	10
d類	0
e類	173
f類	1

a類・b類において、漢字見出しが二行にわたる項目は少数に過ぎられており、『真草二行節用集』はその成立において行末調整の方針をへていると考えられる。⁽¹²⁾d類の万治二年版では、漢字見出しが二行にわたる項目は一項もなく、行末調整が徹底されていることが知られる。c類・f類には、漢字見出しが二行にわたる項目が数項目あるが、それらの項目は、門末近くに位置していて、そのあとに行末調整に利用しうる適当な項目がなかったり、漢字見出しの頭

字を同じくする一連の項目の中に含まれていて、他の項目を挿入すると、同じ頭字の項目を分断することになってしまったりするといふものが多い。一方、e類の寛文四年版では、漢字見出しが二行にわたる項目がきわだたて多く、行末調整が強く意図されているとは考えがたい。

右では、漢字見出しが二行にわたる項目の数をみたのであるが、各版における行末調整の方針の強さをみるために、註文の途中でつぎの行に移る項目がどれくらいあるかをみると、つぎのようになる。⁽¹³⁾

a・b類	74
c類	64
d類	0
e類	93
f類	20

ここでもd類の万治二年版では該当する項目がなく、註文のみが次行に及ぶことも強く避けられていることがわかる。f類の無刊記版も、やや弱いですが、同様の傾向をもつとみてよいであろう。これに比べて、c類の万治元年版では、行末調整は漢字見出しが二行にわたるばあいを中心とし、註文については特に強く行末調整の対象としてははいないかと思われる。

行末調整は項目の配列変更のみによるわけではなく、したがって配列変更箇所の数のみによってその程度の違いとすることはできな

いが、万治二年版と無刊記版の配列変更が行末調整を主眼とするものであることは動かしがたい。

『真草二行節用集』の諸版における配列変更箇所の中には、なぜ配列が変更されているのか、その理由のあきらかでないものがある。関連項目の類聚や行末調整を主としている万治元年版・万治二年版・無刊記版の配列変更箇所の中にも、そうした目的のための配列変更とは考えにくいものが含まれている。それらのなかには、版下作成の作業過程を反映しているのではあるまいかと思われるものもあり、また、当然、単純な誤りと考えられるものもあるが、いずれにせよ、前記の三版では、そうした箇所は全体のなかでは少数にとどまる。

これに対し、寛文四年版では、関連項目の類聚や行末調整とは考えがたい配列変更が多数をしめている。⁽¹⁵⁾ 数丁にわたって配列変更のない箇所や、ほとんどの配列変更が行末調整のためのもつとみられる箇所もあり、そういったかたよりが版下作成の過程とどのようにかわっているのかという問題もあるが、いずれにせよ、全体としては、理由をあきらかにしがたい配列が多い。寛文四年版における項目配列の変更の多くが関連項目の類聚や行末調整といった一定の目的のためのものとは考えがたいことは、項目配列の変更に付随して誤りを生じているばあいが多いことによってもうかがうことができる。寛文四年版がよつたと考えられる寛文元年版には、つぎのような箇所がある。

対治——談——論（上25ウ7）

寛文四年版では、このうちの「——談——論」が九項前に移されているが、その際、漢字見出しを代行する「——」がそのままちいられて、つぎのような配列のなかで使用されている。

談義——論（上26オ4）

つまり、本来、「対論」であつた項目が寛文四年版では「談論」という項目として登録されていることになる。寛文四年版における配列変更箇所のうち、このような誤りは三十三箇所のにほる。

また、上巻二十一丁表では、「黄鷹」という項目のうち、「鷹」の部分のみを前行末に移し、本来、一項目であるものを「黄」と「鷹」に分割するという誤りを生じている。さらに、本来、器財門に含まれている「繩」を名字門に移し、時候門に含まれている「日來 日暮 昏」を官位門に所属させるといった誤りもあり、結局、寛文四年版の配列変更は、本文の内容を正しく保持するという姿勢をいちじるしく欠いたものと言わなければならない。⁽¹⁷⁾

寛文四年版は松会衛の開版であり、刊記によって確認しうるかぎり、江戸の書肆による節用集としてもっとも早い時期のものと考えられる。⁽¹⁸⁾ 寛文四年版にみられる誤りのすべてについて、江戸開版という一点にその理由を求めるわけにいかないことは言うまでもないが、やはり大きな要因として考慮すべきものであらうと思われる。

以上、諸版における項目配列の変更について述べた。最後に、項目配列の変更を含む版について、その性格の違いをまとめておけば、

万治元年版と無刊記版では、項目配列の変更は行末調整を主眼としている。万治二年版は、関連項目の類聚という方針をもつ点に特色があり、ほかに行末調整を意図した配列変更がみられる。寛文四年版は、行末調整のためと思われるものも含まれているが、多くは配列変更の理由が不明で、しかも本文をいちじるしくそこなうところがある。

項目の増補と削除

表1の⑦・⑧に示したように、『真草二行節用集』の諸版における項目の増補や削除は多くはない。〈真草二行節用集〉という同じ書名によってよばれる節用集の諸版であつてみれば、これは当然ともいえる。むしろ、この程度でも項目の有無をことにする版があることに注意すべきであろう。

まず増補についてみれば、万治元年版と無刊記両点版に、それぞれ三項目と七項目の増補がある。万治元年版の増補項目は、つぎのとおりである。

- 壇だん花か (上44オ4)
- (札し)物もの (上48ウ1)
- (違ちが)例れい (中13ウ2)

最初の二例は行末に位置しており、増補それ自体が目的というわけではなく、行末調整の一つの手段であつた可能性が高い。増補項

目がどのようにして選ばれているかは不明である。

一方、無刊記両点版の増補項目は、つぎのとおりである。⁽¹⁹⁾

- 可べし合あひ倭わ (14オ4)
- 類るい船せん (21ウ6)
- 流る宋そう名な (21ウ6)
- 盤ばん九折くせつ道どう (43オ5)

いずれも各部の最後に位置する言語門の末尾の行で、つぎの部に移る改行のために残されたスペースに置かれている。ただし、増補項目は、それぞれの行の途中までにとどめられており、行末までの全体を増補項目でうめるという意図はみられない。また、右の三部のほかにも言語門の最後の行にスペースを残している部があり、これらの三部に限って増補項目が置かれている理由はわからない。増補項目が何によつていられるかも今は未詳とせざるをえない。

万治元年版と無刊記両点版のいずれについても、増補項目が何にもとづいているのかは決しがたいが、少数とはいえ、このような増補項目があることは、これらの版の版下を作成するにあたって、直接に依拠した先行の版のほかに、参照するものがあつたことを示していると考えてよいであろう。

一方、項目の削除は、万治元年版・万治二年版・寛文四年版・無刊記版の四版にみられる。これらの四版は、いずれも項目配列の変更を生じている版である。あとに述べるように、項目配列の変更とすることが項目削除の前提条件になつてゐるわけではないが、行うつりの位置を完全に同じくしようとする、配列変更のない版のあい

だで、途中の項目を削除することは、そうした行うつりの位置の対応をくずしてしまうことになるわけであり、項目の削除は生じにくいであろう。

右にあげた四版について、削除されている項目をみていくと、削除項目のすくない寛文四年版と無刊記版は別として、⁽²⁰⁾万治元年版と万治二年版では、二つの傾向を認めることができる。その一つは万治二年版に顕著な傾向で、万治二年版がよった慶安四年孟冬版で重複して掲出されている項目のうちの一方を削除するものである。⁽²¹⁾削除項目十一項のうち、つぎの八項目がこれに該当する。

縁座	寒	真珠	治定	祠堂	溜	認
もんざ	(さむし)	しんじゆ	じちやう	しだう	したたる	したむ
朦々						

言語門の〈侍^{まふらひ}〉が削除されているのも、人倫門の〈侍^{まふらひ}〉と同一項目とみなされたためであるとすれば、重複項目の一方を削除したものは九項目となる。このような項目削除は、一書の全体を見とおして、掲出項目の概容が把握されていなければできないものであり、それは、項目の配列について、相互に関連のある項目を類聚しようとするときに必要とされるものと共通であろう。

万治元年版の削除項目のなかにも、これがよった慶安三年版において重複して掲出されている項目のうちの一方を除いたものが五項目⁽²²⁾あって、万治二年版と同様の姿勢をもっていたことが知られるが、そのほかに、万治元年版では、本来の項目配列にしたがえば行末に位置するはずの項目（または項目連続）が削除されているというも

のが十二箇所、十五項目にわたってみられる。これは、行末調整のためにいったんとはした項目をそのまま脱落させてしまったものである可能性が高いと思われる。『真草二行節用集』の項目配列を改めた箇所のなかには、少数ながら、いったん誤つてとはした項目をあとおぎなつたとみられるものがある。万治元年版のお部言語門の末尾におかれた、〈落魄^{おちおち}から（音）曲^{まがく}に至る八項目は、万治元年版がよった慶安三年版では、言語門のなかほど、五十三丁表四行目の一行分にあたっている。この前後で行末調整をおこなう必要も認められず、おそらく、当初、この一行を脱し、のちにそれに気づいて門末におぎなつたのであろう。このようにあきらかなもののほか、配列変更の理由を推定しがたい項目のなかにも、同様のものが含まれているかもしれない。このようなばあい、いったんとはされた項目がそのまま見すごされて脱落してしまうということもありえたと考えられる。こういった項目の脱落が万治元年版に比較的多くみられることについて、万治元年版の本文の全体的な傾向からみて、他の版と比べ、特に粗雑であつたり、注意力に欠けたりするためであるとは考えにくい。⁽²³⁾そうした点では、項目配列の変更についてみたように、本文を正確に保持するという姿勢に欠けるところのある寛文四年版において、項目の脱落とみなしうるものがほとんどないことが、むしろ注意される。具体的にどのようなものとは述べがたいが、両者の版下作成の方法に違いがあり、寛文四年版においては、版下作成の方法のなかに、項目の脱落を生じにくくさせる

ような要因があつたのではないであろうか。

異形と補訂

『真草二行節用集』の諸版の対応する項目のあいだで、仮名見出し・漢字見出し・注文などに相違のみられることがある。仮名見出しについて、仮名づかいなどの表記上の違いではなく、語形としてのことなりと解しうるものを「異形」とし、表1の⑤にその数をあげた。濁点の有無の違いは、表記上の違いにとどまるのか、あるいは語形の違いを反映するのか、判断の困難なものがあつて、ここには含めていない。

諸版の対応する項目間の相違のなかには、先行の版をひきづくにあたつて生じた誤りとみるべきものがある。「異形」としたものの中には、そうした誤りと考えられるものは含めていない。誤りなのか、あるいは「異形」とみなしうるのかの判断も困難なものがあるが、誤りとするものの範囲をせまく限定することを原則とした。そうした誤りと判断される内容を含む項目について、それをうけた版でその誤りをただしたと考えられる変更箇所数を表1の⑥に「補訂」としてあげた。

諸版における異形と補訂の数をみると、おおむね、配列変更箇所の多少と対応しているといつてよい。配列変更のない版の方が、記載内容についても、依拠した版をそのままひきづくという傾向が強

いということであろう。そうしたなかで、寛文四年版は配列変更箇所の多さに比べて、異形や補訂がすくない。寛文四年版のばあい、項目配列の変更ということが一項ごとの内容の把握や確認と運動してないのである。そのことは、寛文四年版の配列変更そのものに、本文をそこなうようなものが多くみられたことと共通の傾向といえる。

逆に、無刊記両点版では、配列変更は前述のような一箇所のみであるが、補訂とみられる箇所は多い。具体的にはあとに述べるが、これは無刊記両点版の両点という形式にかかわるところが大きいと思われる。

以下、各版の異形と補訂について、具体的にみていく。はじめに補訂をとりあげる。

補訂の中心をなすのは、仮名見出しの一部、または全体が欠けているばあいにこれを補うこと、仮名見出しにあきらかな誤字等があるばあいにこれをただすこと、仮名見出しとの対応からみて漢字見出しに誤りがあると考えられるばあいにこれを改めることなどであり、そのほか、仮名見出し、漢字見出し、註文中のいずれにかかわらず、文字のていをなさぬものについてこれを訂正したものがある。寛永十五年版をうけた寛永十六年版について、寛永十五年版の誤りをただした箇所のなかから例をあげれば、つぎのようなものがある。

窈↓仮名見出し「うつろ」を補う。

雪きしもはら恥↓仮名見出し中の「し」を「よ」に改める。⁽²⁵⁾

堪忍↓〈忍〉字の楷書体、〈忍〉とあるのを〈忍〉に改める。

す隙↓〈隙〉字の楷書体、文字をなさぬものを〈隙〉に改める。

補訂箇所のない版では、右にあげたようなものに限られており、これらは、あらたな版の版下を作成する過程で、依拠した版の本文に含まれている一見してあきらかな不備を気がついた範囲で改めたものと考えられる。

補訂箇所の多い万治元年版・万治二年版・無刊記両点版でも右にあげたのと同様の補訂が多数をしめる。ただ、依拠した版の誤りのうち、一見してあきらかといえるもののみでなく、一項ごとの内容をややくわしく確認したうえでなければ見すごしそうなどころにまで補訂が及んでいる。補訂箇所の多少は、依拠した版に含まれる誤りの多少によるところもあるが、むしろ、あらたな版が作成されるときの、本文に対する知識と注意力の精粗によるところが大きいといえよう。⁽²⁶⁾

さらに、これらの版における補訂のなかで注目されるのは、依拠した版のみからでは必ずしも誤りと判定しがたい箇所に対して補訂が加えられていたり、補訂の内容に、依拠した版のみからでは生じにくいような内容が含まれていたりすることである。

無刊記両点版がよったと考えられる寛永十六年版には、つぎのよな箇所がある。⁽²⁷⁾

破^{くさ} 壊^{くわい} 敗^{はい} 傷^{きず} 衰^{おとろ} 弊^{へい} 輾^{てん} 車^{くるま}

これに対応する易林本節用集の項目は、つぎのとおりである。

『真草二行節用集』諸版の本文と性格

破^{くさ} 壊^{くわい} 敗^{はい} 傷^{きず} 衰^{おとろ} 弊^{へい} 輾^{てん} 車^{くるま}

つまり、寛永十六年版における〈衰^{おとろ}〉と〈輾^{てん}〉は、それぞれ〈衰^{おとろ}〉と〈輾^{てん}〉の誤りなのであるが、実は、この誤りは、〈衰^{おとろ}〉は草書本節用集、〈輾^{てん}〉は『二行節用集』において生じており、『真草二行節用集』は、初版の寛永十五年版以来、これをひきついでいる。この誤りは、無刊記両点版以外のいずれの版でも訂正されておらず、あらたな版を作成する際に、依拠する版のみの本文をみて、その誤りに気づき、しかも本来の正しい仮名見出しにもどすのは、不可能ではないが、やや困難なように思われる。したがって、無刊記両点版の版下作成においては、直接に依拠した寛永十六年版のほかに参照するところがあつた可能性を考慮すべきであろう。

また、寛永十五年版から慶安四年孟冬版に至る諸版には、つぎの項目がある。⁽²⁸⁾

輾^{てん} 車^{くるま}

易林本節用集には、〈輾^{てん}耳^{みみ}〉と〈輾^{てん}〉があり、『真草二行節用集』の〈輾^{てん}〉は、この二項がまじりあつた形と思われる。これに対し、万治元年版・万治二年版以降の諸版と無刊記両点版ではこれを訂正しようとし、それぞれ、つぎのように改めている。

輾^{てん} (万治元年版、下9オ6)

輾^{てん} (万治二年版、下3オ6)

輾^{てん} (無刊記両点版、90オ4)

これらのうち、万治元年版の訂正は他本の参照がなくても可能か

もしれないが、万治二年版と無刊記両点版の訂正は他本を参照しなければ困難であろう。⁽²⁹⁾

万治元年版と無刊記両点版については、項目の増補がみられる点からも他本を参照していると考えられたのであるが、内容の補訂の状況からも同様のことがいえ、さらに万治二年版についても、他本参照の可能性の-highことが知られる。

なお、版による項目配列の変更の多少と内容の補訂の多少との関連については、さきに言及したが、配列変更のほとんどない無刊記両点版に多くの補訂がみられるのは、両点という形式にもとづくところが大きいであろう。たとえば、無刊記両点版がよった寛永十六年版では、〈博^{はり}陸〉の項目の〈博〉字に対する楷書体が〈轉〉となっているが、無刊記両点版では、これを〈博〉に改めている。このような種類の誤りとその訂正は他の版にもみられるものではあるが、無刊記両点版では、こうした訂正がとくに多くみられる。これは、両点、すなわち真草二行のうちの楷書体で示された漢字見出しに対して、仮名見出しと別に音訓を付記するという形式をとるために、おのずと各項目の漢字見出しの一字ごとに対する確認がおこなわれるということになるのであろう。

つぎに、諸版における異形についてとりあげる。各版の対応する項目のあいだで仮名見出しによって示された語形に違いがみられるばあいを異形としているのであるが、異形としてよいのか、あるいは誤りと考えるべきかの境界は、明確とは言えない。さきにも述べ

たように、表1の⑤の数値は誤りと考えるものの範囲を狭く限定したときのものであり、それだけ、異形としたもののなかには誤りによって生じているものも含まれている可能性がある。

版によって異形があらわれることの意味も、現時点では確定できない。一つ一つの例について、異形のあいだの関係を確認していくことが必要であろう。本稿では、異形の例のすくない版について、逐一、その例をあげることが省略し、もつとも例の多い万治元年版を中心に、おおよその分類をこころみながら、おもな実例を紹介する。

もつとも多いのは、つぎにあげる例のように、字音語における字音の交替で、全体の約三分の一をしめる（上段に慶安三年版の仮名見出しと漢字見出しをあげ、下段に万治元年版の仮名見出しをあげる⁽³⁰⁾）。

肉食^{にくじき}↓にくしよく
凡人^{びんじん}↓ぼんにん
法楽^{ほうがく}↓ほうらく
嫡女^{ちやくにょ}↓ちやくぢよ
直下^{ちうか}↓ぢきげ
強盛^{がうじやう}↓がうせい
楞嚴頭^{れうげんちう}↓れうごんとう
僧籍^{そうせき}↓そうしやく
乱逆^{らんげき}↓らんきやく

乱入↓らんじゆ

懸隔↓けんかく

文籍↓ぶんせき

巨益↓こえき

調声↓てうせい

調和↓てうくわ

山莊↓さんざう

客星↓きやくせい

器物↓きぶつ

経歴↓きやうれき

面目↓めんぼく

磁石山↓じしやくせん

書院↓しよえん

門守↓もんす

省略↓せうりやく

清濁↓せいじやく

醉眠↓すいみん

漢字見出しが字音によって仮名見出しに対応しているもののなかでも、つぎのような例は、やや異質と違ってよいであろう。

法論味噌↓ほうろみそ

反古↓ほんこ

暖簾↓のうれん

苦集滅道↓くぢめち

檢非違使↓けびいし

玄番頭↓けんぱんのかみ

国府↓こくふ

按察使↓あんざつし

棧敷↓さんじき

亀甲↓きつかう

双六盤↓すゝろくばん

文司関↓もんじのせき

寸白↓すんぱく

また、見出し語のうちの一部分が音から訓に、または訓から音に改められているものがある。

定使↓ぢやうし

香合↓かうが

唐物↓たうもつ

毎月↓まいつき

粉河寺↓こかはでら

つぎに和語についてみると、一音節の交替したものがもつとも多く、全体の約二割をしめる。

鈍色↓にひいろ

新嘗会↓にいなまつり

文鰯魚↓とひを

取分↓とりわき

柑取↓かちとり

茵陳藥↓からよもぎ

紙纒菊↓かみゑりきく

蝙蝠↓かうもり

搔餅↓かきもち

鷺↓かまひすし

娛↓たのしむ

若干↓そこばく

償↓つくなふ

名越祓↓なこしのはらひ

瓜↓ふり

田舎人↓いなかうと

丸根↓まるね

慘↓こなかき

拱↓こまぬく

括↓あなどる

決入↓さくりはみ

階↓きざはし

仕過↓しすごし

隱曲↓ひつかゝみ

へ歩板↓あよみのいたはへのの添加をとまなうが、へあゆみ

↓あよみへの変化については、右のグループに含まれる。この例の

ような、一音節の添加、または削除の例として、つぎのものがある。

仁木↓につき

童↓わらべ

造物所↓つくもところ

唧↓ねずなき

完↓まつたし

引出物↓ひきでもの

最後に、その他の語形交替の例をあげる。

隼人正↓はやとのかみ

鳥籠↓とりかこ

押並↓をしなへ

姦↓かたまし

足↓たる

潰↓ついゆ

故↓ふるし

汗拭↓あせのごひ

相語↓あひかたる

疼↓ひらく

守↓まもる

煤掃↓すすきはらひ

仮名見出しの頭字のいろは分類という、節用集の項目分類の原則

があるため、節用集における異形は、頭字を同じくするものという制約をうけているはずであるが、これまであげた例のなかにも、
〈双六盤↓すころくばん〉〈瓜↓ふり〉〈守↓まもる〉など、頭字を
ことにする異形をあげている例がある。

また、これらの異形を有する項目を易林本節用集の対応する項目
とつきあわせてみると、慶安三年版の語形の方が易林本節用集と一
致するものが全体の約三分の二で、逆に万治元年版の異形の方が易
林本節用集の語形と一致するものが約三分の一である。この割合は、
万治元年版以外で異形の多い万治二年版と無刊記版でも、ほぼ同じ
である。

おわりに

最後に、『真草二行節用集』の諸版の特色について、簡単にまと
めておきたい。

寛永十五年版に発する諸版のなかで、寛永十六年版・正保三年仲
秋版・正保三年仲冬版・慶安三年版・慶安四年孟秋版・慶安四年孟
冬版の六版は、依拠した版をそのまま踏襲するという性格が強い。
踏襲とはいえ、依拠した版の一項ごとの内容を再確認したうえで引
きつぐというのではなく、文字を単なる形としてなぞっていくとい
うところがあり、特にのちの版では、文字としてくずれたものや、
まったく文字のていをなさないものも生じている。

このような、本文のくずれともいえるべき状態からの回復をはかつ
たのが万治元年版と万治二年版であった。万治元年版は、直接に依
拠した慶安三年版のほかに参照するところを用いながら、あらたに
版下を書き下ろしている。仮名見出しの語形のことなりは、諸版の
うちでもっとも多く、その意味するところについては今後の検討を
またなくてはならないが、万治二年版や無刊記版とともに、興味あ
る資料を提供している。本稿ではとりあげる余裕がなかったが、万
治元年版には、仮名見出しの仮名づかいや仮名字母の変更もみられ、
こうした面でも特色をもっている。

万治二年版は、紙数をすくなくするという方向を強く示してい
るが、本文については、誤りの補訂につとめており、その補訂の状況
からみて、直接に依拠した慶安四年孟冬版以外に参照するものが
あった可能性がある。項目配列の変更においては、関連性の高い項
目をまとめるという配慮がなされており、重複してかけられている
項目の一方を削除するという現象とともに、一書の全体を展望す
るという目くばりのあとがうかがわれる。

寛文元年版は、この万治二年版をほぼ忠実に踏襲しているが、寛
文元年版をうけた寛文四年版は、『真草二行節用集』の諸版のなか
でも、もつとも誤りの多い版である。その誤りには、単なる不注意
等によるという範囲をこえたものが多く、本文を正しく維持するとい
う姿勢そのものが欠けているのではないかとうたがわれる。寛文
四年版は江戸の開版と考えられる。本文の粗雑さの原因のすべてを

江戸開版という一点に帰するべきではないかもしれないが、近世前期の江戸版にみられる一般的な傾向からみて、そこに関連のある可能性は高いであろう。寛文五年版は寛文四年版をほぼそのまま踏襲しており、一部の極端な誤りを訂正してはいるが、多くの誤りは、そのまま引きつがれている。

刊年不明の版のうち、無刊記版は、万治元年版について、仮名見出しの異形が多い。万治元年版や万治二年版と比べ、異形の多さに比して補訂がすくないのが特徴的である。万治元年版と同様に、仮名づかいや仮名字母にも変更がみられる。

無刊記両点版は、全体としては寛永十六年版をほぼ忠実にひきついでいるが、一項ごとの再確認がなされ、多くの補訂が加えられている。そうした本文に対する注意力が両点という形式にともなうものであろうと考えられることは、さきに述べたとおりである。また、補訂の内容や項目の増補がみられることなどから考えて、無刊記両点版についても、直接に依拠した寛永十六年版のほかに、参照するところがあったであろう。

注

- (1) 『真草二行節用集』の版種「国文学研究」119（一九九六・六）。
- (2) ④⑧の数値は、図1にあげた系統関係にもとづき、直接の親となる版とのあいだでの対校によるものである。なお、注1文献にあげた表と数値をことにするところがある。
- (3) 『真草二行節用集』についてみるかぎり、透き写しがつねに一葉を

単位としておこなわれているとは限らないと思われることに注意する必要がある。つまり、行や項目を単位として、紙を移動させながら透き写しをするといったこともあったように思われる。

- (4) 注1文献、注27参照。

(5) 慶安四年孟秋版についても、配列変更を生じている箇所は、いずれもページのはじめにあたっており、あらたな版下を作る作業のありかたを反映しているかと思われるが、具体的には不明である。

(6) d類には万治二年版と寛文元年版が含まれるが、このようなばあい、あらたに配列変更を生じた万治二年版のみをあげ、万治二年版を踏襲したにすぎない寛文元年版はあげない。以下、同様である。

(7) 節用集では、項目の所属は仮名見出しの頭字（部）と意義分類（門）によつて定められており、ことなる部や門への配列変更は、原則としてない。寛文四年版で誤つてことなる門に項目を移動したもののほかでは、万治二年版で「郡」を言辭門から乾坤門に移したのが唯一の例外である。

(8) 万治二年版で行末調整を意図したとみられる配列変更は、約七十箇所である。

(9) 行末調整の方法は項目配列の変更のみではない。文字の大きさや項目間のあきをかえたり、註文の行数を改めたりすることもある。ただ、そうした方法を併用するかどうかは版によつてことなり、配列変更がもつとも一般的な行末調整の方法であつたと思われる。

(10) 万治元年版では、配列変更箇所全体のうち、行末調整であることのあるあきかなものが約九割であり、無刊記版では約八割である。

(11) 本書本節用集について「国文学研究」83（一九八四・六）。なお、ここでいう一項とは、おもに漢字見出しの部分で、註文については、二行に及ぶことが、特に強くはさけられていない。

(12) このことは、『真草二行節用集』とこれによつた『二叶節用集』の項目配列を比較することによつて確認できる。

(13) たとえば、万治元年版の「木目漬・狗尾草・千駄横」の項目は、いずれも漢字見出しの二字目からが次行となっているが、これは、これらの項目が門末の項目であったり、あるいは門末の近くにあって、そのあとに漢字見出し一字の項目がなかったりするため、行末調整ができなかったものであろう。

(14) し部数量門の「十幹・十二枝・十二時」の異名は、註文が特に長い、ため、いずれの版でも二行以上に及んでおり、ここでは、これを除いて項目数を示した。

(15) 寛文四年版の配列変更箇所のうち、行末調整とみなしうるのは、大めにみて全体の約三割で、そのほかは、配列変更が何を目的としているのか、確定しがたい。

(16) これらの配列変更は、行末調整を目的としておこなわれている。

(17) このほか、寛文四年版では、配列変更にもなうことがらとして、仮名見出しの最初の数文字のみを前行末におき、次行の先頭から、仮名見出しの残りの部分と漢字見出しを示したり、まったく必要のない漢字見出しの代行記号「へ」を行末等に挿入したりすることがみられる。

(18) 注1文献、四九ページ参照。

(19) このほか、無刊記両点版には、寛永十六年版の「紙縷・菊」（本来は全体で一項目であるが、あいだにあきがあり、形式上、二項目のようにみえる）を、「紙縷・無」と改めた箇所があり、この「無」を増補項目と考えれば、増補項目は八項となる。

(20) 寛文四年版と無刊記版における項目削除の理由は不明であるが、無刊記版のうち、し部乾坤門にあるべき「清涼殿」が削除されているのは、仮名見出しの頭字と所属部が一致しないため、誤りとして除いたのであろう。

(21) 同様の現象は、易林本節用集をうけた草書本節用集にもみられる。注11文献、五〇ページ参照。

(22) 言語門の「侍」は、易林本節用集では「侍」とあった項目であるが、「真草二行節用集」では、寛永十五年版において、すでに「侍」とある。

(23) 削除されている五項目のうち、四項目は万治二年版の削除項目と共通であるが、これは、万治元年版と万治二年版が重複項目の一方を除くという、同じ方針をもって項目削除をおこなったことによる偶然の一致であり、両版の系統関係上のかかわりを示すものではない。

(24) 万治元年版の巻末には短い識語が付されているが、そのなかに、
「余節用集前々板行之誤多故今新校以刊之」とある。こうしたことは、単なる修辭にとどまることもあるが、万治元年版のばあい、本文の性格からみて、このことは、実情を反映したものであろう。なお、右に引いたところにつづいて、「加句切」とあるように、万治元年版では項目の切れ目を「へ」または「へ」の圏点で示している（五ページ図版参照）。近世節用集のなかで、項目の境界をこういった点で示すものとしては、管見のうちでは、万治元年版がもっとも早い。

(25) 正確には、「へ」の字体ともややことなるようにみえるが、もっとも近い字体として、「へ」をあてておく。

(26) 削除項目に関して注23に述べたのと同様に、誤りの訂正も、系統上の関係とは別に、偶然に一致することがあり、これを系統関係を設定する際の指標とするのには、注意を要する。

(27) 正確には、「衰」字の書体と、「輓」の項目の註文の書体がやくずれたものになっている。

(28) 「懸」字の行書体は、版によつてはやくずれたものになっている。

(29) ちなみに、「みみだれ」に「懸」一字をあてた項目は、草書本節用集や「二鉢節用集」にある。

(30) 以下の引用では、語形を示すことを主眼とするので、仮名見出しや漢字見出しに代行の「同」や「へ」が用いられているばあいでも、かっこに包んで区別することはしない。